

「保育・教育・福祉実践研究プログラム」（「教育実践研究」の例）

1. 概要

特別支援学校・特別支援学級における授業づくりに関する自己課題を設定し、附属特別支援学校を主たるフィールドとして、その解決に取り組みます。

1・2学期は、自己課題の発見に資する活動を中心に授業が組まれています。月2回程度集まり、授業づくりについての講義、フィールドの紹介、授業参観、自己課題を明確にするための討議を行います。それ以外は、自己課題を明確にするために、学生それぞれが自主的に附属特別支援学校以外のフィールドを訪問したり、授業づくり研修会に参加したり、文献を調べたりする時間としています。

3・4学期は、自己課題の解決に資する活動を中心に授業が組まれています。1・2学期同様、月2回程度集まり、自己課題と関連付けながら授業批評や先行研究分析を行います。それ以外は、授業づくり研修会や研究発表会、学校支援ボランティアへの参加、あるいは文献調査等を通して、自主的に課題解決に向けた取り組みを行う時間としています。

学期	内容
1 学期	附属特別支援学校の教育についての講義、附属特別支援学校の授業参観と振り返り、附属特別支援学校の授業づくり研修会参加と振り返り、課題発見のための討議
2 学期	附属特別支援学校の授業参観と振り返り、附属特別支援学校の授業づくり研修会参加と振り返り、自己課題発見のための先行研究分析と討議
3 学期	附属特別支援学校での実習授業（又は勤務校での授業）の自己課題に基づくビデオ分析、自己課題解決のための先行研究分析
4 学期	附属特別支援学校での実習授業（又は勤務校での授業）の自己課題に基づくビデオ分析、自己課題解決のための先行研究分析、附属特別支援学校の授業づくり研修会参加と振り返り、附属特別支援学校研究発表会参加と振り返り、自己課題解決についての発表

2. 自己課題

以下に、学生が設定した自己課題を例示します。

- 中学校特別支援学級における自己理解を深める指導
- 遊びの指導の意義と効果的な支援の仕方
- 特別支援学校で勤務する上で必要な心構え
- 刺激反応連鎖の細やかな把握と柔軟な課題調整
- 知的障害のある子どもに対するコミュニケーション支援

- 知的障害のある生徒が自発的に取り組むことができる教材づくり
- 構造化の有用性について

3. 自己課題解決

「刺激反応連鎖の細やかな把握と柔軟な課題調整」をテーマとして設定した学生（以下、Hさん）を例に、自己課題解決の取り組みを紹介します。

Hさんは、知的障害特別支援学校に6年間の勤務経験がありました。各教科等、様々な指導場面で生徒のひたむきな姿を目にしてきた一方、彼らが教師側の意図通りに取り組めない状況に何度も出会うたびに、そこで起きていることをどのように分析し、具体的な手立てをどのように見出していけばよいのかについて悩むことが多かったようです。

大学の講義を受ける中で、Hさんは、応用行動分析学に興味を持ちました。強化や弱化、消去、動機づけ操作、刺激性制御、プロンプト、シェイピング、連鎖化、分化強化等の概念を学ぶ中で、教師の意図と子どもの受けとめの間に生じているズレ現象を言語化してくれるツールを得たように感じました。そこで、エクステンション・プログラムでは、自ら実践した指導事例について、応用行動分析の概念を借りながら、教師の意図と子どもの受けとめの間に生じているズレ現象を言語化し、それを蓄積することに取り組みました。以下が、知的障害生徒への数概念の指導に関するHさんの分析レポートの一例です。

.....

ある場面で、見本1とワークシート1のようなプリントを用いて学習を行っていた。見本を見ながら、ワークシートの対応する箇所に必要な数のシールを貼る、という活動である。しかし実際は、見本と同じようにシールを貼ることのできない生徒が数人いた。

見本の情報過多が原因であると私たち教師は予想し、見本2のように短冊状にしたものを1枚ずつ提示するようになった。この工夫によってシールが貼れた生徒（以下、生徒A）がいた。

ミルテンバーガーは著書の「行動変容法入門」（2006）の中で次のように述べている。

見本1		ワークシート1	
1	●	1	
2	● ●	2	
3	● ● ●	3	
4	● ● ● ●	4	
5	● ● ● ● ●	5	

見本2

1	●
---	---

1	●
---	---

行動連鎖を個々の刺激-反応単位に細かく分けることによって分析する過程は、**課題分析**と呼ばれる。2つ以上の単位行動（行動連鎖）からなる複雑な課題を教える際には、最初のステップとして、その課題を遂行するために必要となるすべての行動を明確にし、順に書き留めるべきである。次に、その課題のそれぞれの行動に関連する弁別刺激を明確にする。実際に教える際には、行動連鎖の個々の刺激-反応単位に関する弁別訓練が必要となる。そこで、刺激-反応単位を正確に理解するための詳細な課題分析が必要となる。(p. 179)

表1は、見本1とワークシート1を用いた学習の課題分析を行ったものである。生徒Aは、最初のステップである「見本の『1』の欄を見る」の段階でどこを見たらよいか分からず視線が定まらないため、「1」の欄にある1つの●が次の反応のための弁別刺激として成立せず、シールを貼ることができなかつたと考えられる。見本2のように短冊状見本を教師が一つずつ提示することにより、見るべき対象が明確になり、●が弁別刺激として成立したため、生徒Aはシールを貼ることができたと言えるだろう。

表1 課題分析表

	弁別刺激	反応
1	見本、ワークシート、シール	見本「1」の欄を見る
2	「1」の欄にある1つの●	シールを1枚手に取る
3	手に1枚のシール	ワークシートの「1」の欄にシールを1枚貼る
4	ワークシートの「1」の欄にある1つの●	見本の「2」の欄を見る
5	「2」の欄にある2つの●	シールを2枚手に取る
6	手に2枚のシール	ワークシートの「2」の欄にシールを2枚貼る
7	ワークシートの「2」の欄にある2つの●	見本の「3」の欄を見る
8	「3」の欄にある3つの●	シールを3枚手に取る
9	手に3枚のシール	ワークシートの「3」の欄にシールを3枚貼る
10	ワークシートの「3」の欄にある3つの●	見本の「4」の欄を見る
11	「4」の欄にある4つの●	シールを4枚手に取る
12	手に4枚のシール	ワークシートの「4」の欄にシールを4枚貼る

13	ワークシートの「4」の欄にある4つの●	見本の「5」の欄を見る
14	「5」の欄にある5つの●	シールを5枚手に取る
15	手に5枚のシール	ワークシートの「5」の欄にシールを5枚貼る

.....

3・4学期を通して、Hさんは、こうした分析事例を蓄積し、それと並行して勤務校の授業に参加し、授業改善に取り組みました。